研究ノート

明治の２つの時期の幼児唱歌と現在の幼児の歌[註1)]における音楽的特徴の統計的検討

A Statistical Study of Musical Characteristics among Children's Songs, from Two Periods in the Meiji Era and in Modern Children's Songs

岩　口　摂　子

キーワード　明治の幼児唱歌、現在の幼児の歌、音楽的特徴、幼児にとっての歌いやすさ

は　じ　め　に

明治の幼児を対象にした唱歌は、日本で最初の音楽の教科書『小学唱歌集』より先に作成された『保育唱歌』に始まる。東京女子師範学校附属幼稚園で保育のために音楽が必要になり、明治 10～13 年に宮内省式部寮雅楽部によって作成されたものである。現存 100 曲のうち 91 曲が律旋で、雅楽の影響が大きい。その後、明治 19 年に市川八十吉編『幼稚園唱歌』（鴻盟社）[註2)]や明治 20 年に眞鍋定造編輯『幼稚唱歌集』（普通社）が出版されるが、官製のものは明治 20 年に文部省音楽取調掛が作成した『幼稚園唱歌集』が最初である。これは「標題には『幼稚園』とあるが、実際には幼稚園ばかりでなく小学校低学年でも使われており」[1)]、歌詞や旋律の内容が『小学唱歌集』と同等のレベルにおかれ、「きらきらぼし」「ぶんぶんぶん」「ちょうちょう」「かすみか雲か」など外国曲の借用が多い。また明治 21 年から 22 年にかけて刊行された、『明治唱歌幼稚の曲第 1 集第 2 集』でも外国曲が多用されている。それ以降、民間において A. L. ハウ撰の『幼稚園唱歌（正編）（續編）』や、日本人によって作曲された唱歌集が続く。その中には歌唱だけを目的にするのではなく、「唱歌遊戯」と呼ばれる、身体表現を伴いながら歌うスタイルの歌も多く含まれるが、歌の音楽的側面においては時期によって特徴が異なっている。本研究では、明治の異なる 2 つの時期の幼児唱歌を比較し、さらに現在、定番化されている幼児の歌（以降、現在の幼児の歌）も加えて比較することによって、時期による音楽的特徴の違いを捉え、主に幼児にとっての歌の歌いやすさの点から検討することを目的とする。

明治の幼児唱歌の時期的な特徴の変化を、統計的に検討したものに三村の研究[2)]がある。三村は、明治時代の幼稚園教育思想及び幼稚園における唱歌教育論の変遷を追うとともに、唱歌教材の音域・音程・音価の分析から算出された統計量をもとに、年代（明治前期・中期・後期）で各時期の音楽的特徴を比較し、幼稚園思想の変化と唱歌教材の関連性について検討して

いる。そして、幼稚園思想が次第に幼児の視点に立ったものになるにつれて大人にとって望ましいとされる唱歌教材から、幼児の能力や特性に適合した歌いやすい唱歌教材へと変化していったと結論づけている。この研究の音楽的側面での分析に言及すると、この研究では、明治各期における、音域（音域の平均、1 oct＋短 3 度以上の音域を持つ曲の占める割合）や、音程（音程の平均、特に歌いにくいとされる増 4・減 5 度、短 2 度、長短 7 度音程、短 7 度以上の音程の占める割合）、音価（音価の平均、音価の割合）が、折れ線グラフや 100％ 積み上げ棒グラフを使ってその推移が視覚的にわかりやすく示されている。また各唱歌集における音階の種類の割合も 100％ 積み上げ棒グラフで表されており、数少ない明治期の幼児唱歌研究の一つであるのみならず、数量的な分析を用いた貴重な資料と言える。ただ明治を 3 つの時期で区分し分類された唱歌集に関しては、別の検討の可能性も考えられる。この研究で調査対象とした唱歌集は、国立音楽大学音楽研究所年報第 4 集（1980）にある『唱歌教材目録（明治編）』、及び国立音楽大学音楽研究所年報第 5 集（1984）の中の『唱歌索引（明治編）』に掲載されている「昭和 55 年度版追録」に記載されている唱歌集のうち、題名、緒言或いは歌詞によって幼稚園に関連する唱歌集であることが明白なものすべてを網羅し[3]、これ以外に入手できた唱歌集 2 点、A. L. ハウ撰『クリスマス唱歌』（明治 27 年）と神戸私立頌栄幼稚園保姆傳習所編『京阪神幼稚園遊嬉』（明治 45 年）も追加したとしている（表 1）。この研究では、幼児唱歌集を網羅的に分析の対象としているために、各時期の、おしなべての傾向は把握することができるが、明治前期の区分に雅楽がベースの保育唱歌が、外国曲の借用の多い『幼稚園唱歌集』と『幼稚唱歌集』と共に入っており、明治中期には、キリスト教主義の私立幼稚園で使用された A. L. ハウ撰の 3 冊（全て外国曲）が、日本人によって作曲された唱歌集とともに入っているために、一つの時期変数としてまとめると、本格的に西洋音楽を導入した明治の日本人によ

表 1　先行研究[2]の分析で使われた明治の幼児唱歌集

明治前期	保育唱歌（明治 10～13 年）
	幼稚園唱歌集（明治 20 年）文部省音楽取調掛編纂
	幼稚唱歌集（明治 20 年）眞鍋定造編輯
明治中期	明治唱歌幼稚の曲第 1 集・第 2 集（明治 21～22 年）大和田建樹・奥好義編
	幼稚園唱歌（明治 25 年）A. L. ハウ撰
	保育遊戯唱歌集（明治 26 年）白井規矩郎編輯
	クリスマス唱歌（明治 27 年）A. L. ハウ撰
	幼稚園唱歌續編（明治 29 年）A. L. ハウ撰
	新編遊戯と唱歌（明治 30 年）中村秋香作歌・白井規矩郎編輯
明治後期	幼稚園唱歌（明治 34 年）瀧廉太郎　共益商社編
	日本遊戯唱歌・初編～第七編（明治 34～36 年）鈴木米次郎編
	幼稚唱歌上巻・下巻（明治 36 年）吉田恒三
	育児唱歌春の巻・夏の巻・秋の巻（明治 36～37 年）渡邊森蔵編
	唱歌幼稚園（明治 44 年）目賀田萬世吉
	教育幼稚園唱歌集（明治 44 年）園山民平
	京阪神幼稚園遊嬉（明治 45 年）神戸私立頌栄幼稚園保姆傳習所編

る編集・作曲の唱歌の時期的な特徴は捉えにくいと考えられた。また音価の分析においては、歌詞1文字に付されている音符の合計した長さが表わされていて、歌詞と音の長さの関連により言文一致の程度を調べるには有効であるものの、リズムとしての形まではわからない。

そこで本研究では、日本人の作曲・編集による幼児唱歌に限定して、それらの音楽的特徴の時期的変化を分析することを目的とし、A. L. ハウ撰の3冊と、雅楽がベースになっている『保育唱歌』も除外することにした。また唱歌の時期の区分についても、三村の研究で、文部省編纂の『幼稚園唱歌集』が出版された明治20年までを前期、明治21年から31年までを中期、「幼稚園保育及設備規程」が制定された明治32年から45年までを後期としていたものを、明治20年頃と明治中期（ここでは明治26年）から明治末までの2期とした。明治10〜13年に作成された『保育唱歌』を除くと、明治20年の『幼稚唱歌集』と『幼稚園唱歌集』が繰り上がり、その1〜2年後に作成された『明治唱歌幼稚の曲』とそれに続く『保育遊戯唱歌集』（明治26年刊）との間が少しあくため、『幼稚唱歌集』、『幼稚園唱歌集』、『明治唱歌幼稚の曲』を明治20年頃の幼児唱歌としてまとめた。また『保育遊戯唱歌集』以降、明治末までに刊行された幼児唱歌集は、明治20年頃の唱歌と異なり、外国曲の借用がないため、それらをひとまとめにすることによって、より明確に音楽的な特徴の差を捉えることができると考え、明治中期以降の幼児唱歌としてまとめた。そして本研究の目的に即し、次のような3つの課題を設定して統計的に分析をすることとした。

課題1. 明治期の幼児唱歌を音楽的な特徴によって、①明治20年頃のものと、②明治中期以降のものとに分けることができるか。

課題2. ①明治20年頃の幼児唱歌、②明治中期以降の幼児唱歌に、③現在の幼児の歌を比較する変数として加えた場合、どのような音楽的項目で差がみられるか。

課題3. ①明治20年頃の幼児唱歌、②明治中期以降の幼児唱歌、③現在の幼児の歌では、どのようなリズムの出現において差がみられるか。

方　　法

1　分析対象曲

明治期の幼児唱歌集は、先行研究[2)]で使われていた日本人による作曲・編集の幼児唱歌集12冊のうち、入手できた10冊を対象とした（表2）。未入手の2冊は②明治中期以降に入るが、その2冊を除いたとしても、分析曲数は①明治20年頃は115曲、②明治中期以降は151曲と②は①を大きく上回っており、標本数は十分で比較・分析には支障がないと判断した。また数字譜で書かれているものは5線譜に変換して分析を行った。

③現在の幼児の歌は、今まで著者が幼児の歌の分析で使用していた曲の一部で、2000年から2002年の論文でまとめた幼児の歌の研究[4)5)6)]で使用した80曲と、2008年に出した幼児の歌の研究[7)]で用いた104曲の両方において重複していた66曲とした（表3）。前者の80曲は、全国の保育者養成校で使用されていた7冊のテキスト[8)]で重複した曲で、後者は、前者で抽出した曲の定着化が時間的経過によって変化している可能性もあると考え、改めてAmazon.co.jpのウェブサイトで“幼児”、“保育”、“うた（歌）”をキーワードにヒットし、かつ2001年から2007年の間に初版された10冊の

表 2　今回の分析に使用した明治の幼児唱歌集

①明治 20 年頃	幼稚園唱歌集（明治 20 年）文部省音楽取調掛編纂
	幼稚唱歌集（明治 20 年）眞鍋定造編輯
	明治唱歌幼稚の曲第 1 集・第 2 集（明治 21～22 年）大和田建樹・奥好義編
②明治中期以降	保育遊戯唱歌集（明治 26 年）白井規矩郎編輯
	新編遊戯と唱歌（明治 30 年）中村秋香作歌・白井規矩郎編輯
	幼稚園唱歌（明治 34 年）瀧廉太郎　共益商社編
	日本遊戯唱歌・初編～第七編（明治 34～36 年）鈴木米次郎編
	育児唱歌春の巻・夏の巻・秋の巻（明治 36～37 年）渡邊森蔵編
	唱歌幼稚園（明治 44 年）目賀田萬世吉
	教育幼稚園唱歌集（明治 44 年）園山民平

表 3　現在、定番化されている幼児の歌（現在の幼児の歌）

No.	曲名	発表年	No.	曲名	発表年
1	ぶんぶんぶん	1887	34	小さい秋みつけた	1955
2	みずあそび	1901	35	線路はつづくよどこまでも	1955
3	お正月	1901	36	ミッキーマウスマーチ	1955
4	はるがきた	1910	37	すうじのうた	1955
5	ゆき	1911	38	サッちゃん	1959
6	かたつむり	1911	39	大きな栗の木の下で	1959
7	どんぐりころころ	1921	40	トマト	1960
8	しゃぼんだま	1922	41	おなかのへるうた	1960
9	夕やけこやけ	1923	42	アイスクリームの歌	1960
10	こいのぼり	1931	43	いぬのおまわりさん	1960
11	まめまき	1932	44	動物園へ行こう	1961
12	チューリップ	1932	45	コンコンクシャンのうた	1961
13	もみじ	1936	46	おもいでのアルバム	1961
14	まつぼっくり	1936	47	あめふりくまのこ	1962
15	うれしいひなまつり	1936	48	おはなしゆびさん	1962
16	やぎさんゆうびん	1939	49	とんでったバナナ	1962
17	ドレミの歌	1940	50	アイアイ	1962
18	たきび	1941	51	山のワルツ	1963
19	たなばたさま	1941	52	おはながわらった	1963
20	こぎつね	1947	53	小さな世界	1963
21	やまのおんがくか	1948	54	手のひらを太陽に	1963
22	とんぼのめがね	1949	55	まっかな秋	1963
23	おつかいありさん	1950	56	おもちゃのチャチャチャ	1963
24	こおろぎ	1951	57	おばけなんてないさ	1964
25	かわいいかくれんぼ	1951	58	一年生になったら	1965
26	めだかのがっこう	1951	59	あわてんぼうのサンタクロース	1966
27	大きなたいこ	1952	60	バスごっこ	1968
28	手をたたきましょう	1952	61	げんこつ山のたぬきさん	1970
29	ぞうさん	1953	62	森のくまさん	1972
30	あひるのぎょうれつ	1953	63	南の島のハメハメハ大王	1976
31	ことりのうた	1954	64	アンパンマンのマーチ	1988
32	ふしぎなポケット	1954	65	さんぽ	1988
33	おかあさん	1954	66	世界中のこどもたちが	1989

幼児対象の歌集で重複した104曲を抽出したものである。

なお分析対象曲では、①明治20年頃に属する眞鍋定造編輯『幼稚唱歌集』の34曲のうち24曲が、文部省音楽取調掛編纂の『幼稚園唱歌集』と重複していたので一方だけを残した。また2つの時期で重複した曲は「蜜蜂」「みずあそび」「お正月」であった。「蜜蜂」は①明治20年頃の幼児唱歌と③現在の幼児の歌で重複（③における曲題は「ぶんぶんぶん」）、「みずあそび」と「お正月」は共に、②明治中期以降の幼児唱歌と③現在の幼児の歌で重複しており、その3曲を分析から外したため、最終的な分析曲数は①が91曲、②が149曲、③が63曲となった。

2　分析の手続き

本研究では時期の異なる幼児の歌の音楽的特徴を、主に幼児にとっての歌いやすさの点から検討することを目的としているため、分析する音楽的項目として、歌の最低音と最高音の差である音域、拍子、前後2音の音程、曲の始まり、最高音（歌の旋律の中で一番高い音）、四七抜き長音階の使用、調の7つを設定した。課題1では、明治の幼児唱歌を、これら7つの項目を説明変数とし、2つの時期（①明治20年頃と②明治中期以降）（目的変数）に分けることができるかを明らかにし、その影響の向きと大きさを示すことができる数量化Ⅱ類を用いることにした。データは歌の音域（9度以上か否か）、拍子（3/4、3/8、6/8かそれ以外か）、音程（前後2音間の音程が8度以上のものがあるか否か）、曲の始まり（弱起か否か）、最高音（2点ホより上か否か）、四七抜き長音階（四七抜き長音階か否か）、調（調号が3個以上か否か）において該当を1、非該当を0と入力し[註3)]、群馬大学の青木繁伸氏が作成した数量化Ⅱ類のプログラム[註4)]を使用した。

課題2では、課題1と同じ音楽的項目での出現数を、①幼児20年頃の幼児唱歌、②明治以降の幼児唱歌、③現在の幼児の歌ごとにクロス集計表にまとめχ^2検定を行い、有意性が認められた項目でさらに残差分析を行った。

課題3では、基本となる拍の長さをそろえなければ比較ができないため、全体の90%を占める4分音符を1拍とする拍子の曲だけを対象とし、曲ごとに出現したリズムの頻度を数え、①明治20年頃の幼児唱歌、②明治中期以降の幼児唱歌、③現在の幼児の歌の各群での平均値を算出した。各期の標本数に偏りがあることから、等分散を前提とせずに行える平均値同等性の耐久検定（Brown-Forsythe法）で有意性の有無を確認し、有意性を示した項目では、さらにどの時期とどの時期の歌との間で有意差がみられるか多重比較（Games-Howell法）を行った。課題2と課題3の分析ではSPSS 15.0 J統計パッケージを使用した。

結果と考察

明治20年頃と明治中期以降の幼児唱歌は、表4と図1に示された項目で分けることができた。明治20年頃の幼児唱歌に作用していたのは、影響の強さ順に、弱起での始まり、3/4、3/8、6/8の拍子、四七抜き長音階でない、最高音が2点ホより上であり、多く借用していた西洋の曲の影響が示唆された。それに対して明治中期以降の幼児唱歌の方にもっとも強く影響をしていたのは四七抜き長音階で次いで、音域が9度以上であった。相関係数、相関比はそれぞれ評価できる大きさであり、その結果が判別の的中率（77.5%）に現れている。

表 4　数量化（Ⅱ類）理論による分析結果

相関比＝Eta Square＝0.430	*N*	カテゴリーウェイト	レンジ	偏相関係数
調号 3 個以上でない	199	0.028	0.163	0.052
調号 3 個以上	41	−0.135		
四七抜き長音階でない	149	−0.437	1.152	0.402
四七抜き長音階	91	0.715		
2 点ホより上でない	169	0.171	0.577	0.199
2 点ホより上	71	−0.406		
弱起でない（強起）	206	0.127	0.894	0.227
弱起	34	−0.767		
音程 8 度以上でない	212	0.044	0.376	0.099
音程 8 度以上	28	−0.332		
3/4, 3/8, 6/8 以外	209	0.107	0.827	0.198
3/4, 3/8, 6/8	31	−0.720		
音域 9 度以上でない	145	−0.249	0.629	0.242
音域 9 度以上	95	0.380		

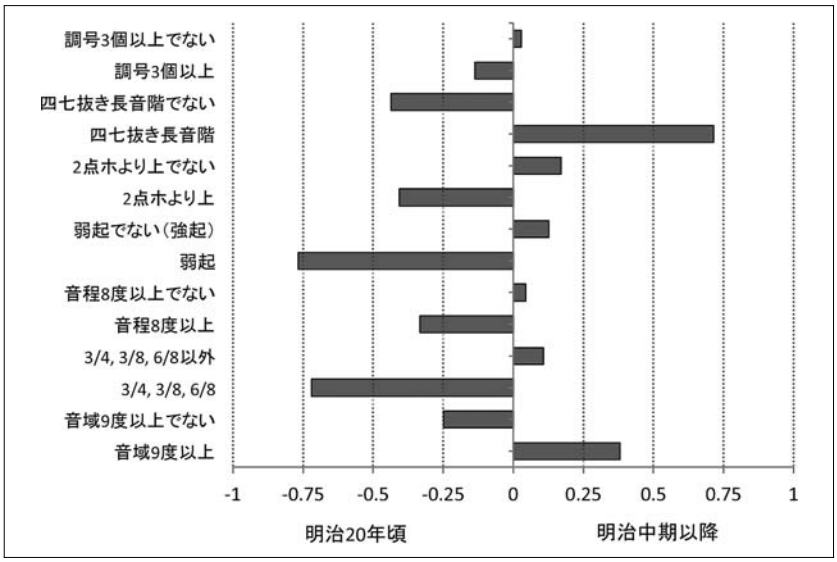


図 1　明治の幼児唱歌集を 2 つの時期に分ける要因

表 5　判別の的中状況

		判別結果		
		明治20年頃	明治中期以降	計
調査結果	明治20年頃	84	7	91
	%	92.3	7.7	100.0
	明治中期以降	47	102	149
	%	31.5	68.5	100.0

全体の的中率は 77.5％

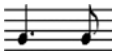
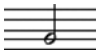
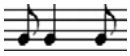
次に課題 1 と同じ音楽的項目において、現在の幼児の歌を変数として増やした 3 群での出現数の比較のために行った χ^2 検定で有意差が認められたものは、音域と音程以外の項目、即ち、拍子（$\chi^2(2)=53.017$, $p<.01$）、曲の始まり（$\chi^2(2)=47.274$, $p<.01$）、最高音（$\chi^2(2)=50.666$, $p<.01$）、四七抜き長音階（$\chi^2(2)=$

表 6　有意性が認められた項目における残差分析の結果

		明治 20 年頃	明治中期以降	現在	合計
調号 3 個以上でない	度数	72	127	59	258
	%	27.9	49.2	22.9	100.0
	期待度数	77.5	126.9	53.6	258.0
	調整済み残差	−1.9†	0	2.1*	
調号 3 個以上	度数	19	22	4	45
	%	42.2	48.9	8.9	100.0
	期待度数	13.5	22.1	9.4	45.0
	調整済み残差	1.9†	0	−2.1*	
合計	度数	91	149	63	303
	%	30.0	49.2	20.8	100.0
		明治 20 年頃	明治中期以降	現在	合計
四七抜き長音階でない	度数	86	63	42	191
	%	45.0	33.0	22.0	100.0
	期待度数	57.4	93.9	39.7	191.0
	調整済み残差	7.4**	−7.4**	0.7	
四七抜き長音階	度数	5	86	21	112
	%	4.5	76.8	18.8	100.0
	期待度数	33.6	55.1	23.3	112.0
	調整済み残差	−7.4**	7.4**	−0.7	
合計	度数	91	149	63	303
	%	30.0	49.2	20.8	100.0
		明治 20 年頃	明治中期以降	現在	合計
2 点ホより上でない	度数	46	123	61	230
	%	20	53.5	26.5	100.0
	期待度数	69.1	113.1	47.8	230.0
	調整済み残差	−6.8**	2.7*	4.4**	
2 点ホより上	度数	45	26	2	73
	%	61.6	35.6	2.7	100.0
	期待度数	21.9	35.9	15.2	73.0
	調整済み残差	6.8**	−2.7*	−4.4**	
合計	度数	91	149	63	303
	%	30.0	49.2	20.8	100.0
		明治 20 年頃	明治中期以降	現在	合計
弱起でない	度数	63	143	62	268
	%	23.5	53.4	23.1	100.0
	期待度数	80.5	131.8	55.7	268.0
	調整済み残差	−6.9**	4.0*	2.8**	
弱起	度数	28	6	1	35
	%	80.0	17.1	2.9	100.0
	期待度数	10.5	17.2	7.3	35.0
	調整済み残差	6.9**	−4.0*	−2.8**	
合計	度数	91	149	63	303
	%	30.0	49.2	20.8	100.0
		明治 20 年頃	明治中期以降	現在	合計
3/4,3/8,6/8 以外	度数	63	146	61	270
	%	23.3	54.1	22.6	100.0
	期待度数	81.1	132.8	56.1	270.0
	調整済み残差	−7.3**	4.9**	2.2*	
3/4,3/8,6/8	度数	28	3	2	33
	%	84.8	9.1	6.1	100.0
	期待度数	9.9	16.2	6.9	33.0
	調整済み残差	7.3**	−4.9**	−2.2*	
合計	度数	91	149	63	303
	%	30.0	49.2	20.8	100.0

† $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$

表 7　各時期におけるリズムの平均出現頻度の比較

		N	平均値	平均値同等性	多重比較
R 1	①明治 20 年頃	70	20.33		
	②明治中期以降	149	13.38	**	①＞②，①＞③
	③現在	62	10.76		
R 2	①明治 20 年頃	70	7.20		
	②明治中期以降	149	10.29	*	②＞①
	③現在	62	10.71		
R 3	①明治 20 年頃	70	1.17		
	②明治中期以降	149	3.66	**	②＞①，③＞①
	③現在	62	5.81		
R 4	①明治 20 年頃	70	1.23		
	②明治中期以降	149	1.51	n.s.	
	③現在	62	1.00		
R 5	①明治 20 年頃	70	2.10		
	②明治中期以降	149	1.86	*	③＞②
	③現在	62	3.06		
R 6	①明治 20 年頃	70	0.49		
	②明治中期以降	149	0.85	*	③＞①
	③現在	62	1.47		
R 7	①明治 20 年頃	70	1.86		
	②明治中期以降	149	1.4	n.s.	
	③現在	62	1.56		
R 8	①明治 20 年頃	70	0.00		
	②明治中期以降	149	0.02	―（注）	③＞①
	③現在	62	0.27		
その他	①明治 20 年頃	70	1.04		
	②明治中期以降	149	2.46	**	②＞①，③＞①
	③現在	62	3.48		

*p＜.05, **p＜.01
（注）明治 20 年頃の幼児唱歌の出現が 0 であったため検定不可能

66.578, p＜.01）、調（$\chi^2(2)=6.217$, p＜.05）であった。有意差が認められた項目の残差分析の結果は表 6 に示す。調号が 3 個以上では、明治 20 年頃の幼児唱歌が有意に多い傾向がみられ、現在の幼児の歌は有意に少なかった。四七抜き長音階で構成されたものは、明治中期以降の幼児唱歌が有意に多く、明治 20 年頃の幼児唱歌が有意に少なかった。「最高音が 2 点ホより上」「弱起」「3/4、3/8、6/8」は、明治 20 年頃の幼児唱歌が有意に多く、明治中期以降の幼児唱歌と現在の幼児の歌が有意に少なかった。

最後にこれら 3 群における、各リズムの平均出現頻度の比較を行った。表 7 での各リズムの平均出現数をみると、どの時期の歌においても、R 1 はもっとも多く、続いて R 2 が多かった。しかし 3 番目に多いリズムは明治 20 年頃の幼児唱歌、明治中期以降の幼児唱歌、現在の幼児の歌とでは異なっている。明治中期以降の幼児唱歌と現在の幼児の歌はどちらも 3 番目は R 3 で、続く 4 番目、5 番目も同じリズムであ

った。平均値同等性の耐久検定では、R 4 と R 7 以外で有意差が認められた。この中で特徴的だったのは、R 3 の、1 拍を付点 8 分音符＋16 分音符で表す「ぴょんこ節」と呼ばれる、四七抜き長音階とともに、“唱歌調”[9]の特徴とされるリズムで、明治中期以降の幼児唱歌と現在の幼児の歌が明治 20 年頃より有意に多く、明治中期以降、現在の歌に引き継がれているリズムであることが示された。また R 8 のシンコペーションの出現は、明治 20 年頃の幼児唱歌での出現が 0 で平均値同等性の耐久検定は不可であり、他の群での出現も少ないが、2 群での有意差をみる多重分析においては、現在の幼児の歌は、明治 20 年頃の幼児唱歌に対して有意性を示しており、現代的な傾向を現わしている。「その他のリズム」としてまとめた項目に入っているリズムは様々であるが、明治中期以降の幼児唱歌と現在の幼児の歌が明治 20 年頃より有意に多かったということは、逆に明治 20 年頃の幼児唱歌で使われていたリズムの種類が少なかったということもできよう。

各時期の歌の特徴をまとめてみると、明治 20 年頃の幼児唱歌は調号 3 個以上、四七抜き長音階でない、最高音が 2 点ホ以上、弱起での始まり、3/4、3/8、6/8 が多く、外国曲の影響が顕著であった。四七抜き長音階でないということは、7 音長音階で第 4 音と第 7 音を含むことになり半音の音程が生じるわけであるが、当時は日本人全体としてミ−ファ、シ−ドの半音の音程が取りづらかったこと[10][11]、幼児の声域では 2 点ホ以上の音を出すことが難しいこと、弱起での歌い出しも難しいこと、日本語の区切りは 3 拍子ではなく 2 拍子か 4 拍子にあてはまりやすいことを考えると、この頃の歌を幼児が歌うことは難しく、幼児の発達に即したものではなかったことが容易に想像できる。それに比して明治中期以降の幼児唱歌では、四七抜き長音階、最高音が 2 点ホ以上でない、弱起でない、拍子が 3/4、3/8、6/8 以外の項目で有意性がみられた。先行研究[2]で述べられている、明治の幼児唱歌は、中期・後期となるにつれて、「幼児の能力や特性に適合した歌いやすい唱歌教材へと変化していった」[12]と同様の結果が、分析対象曲や時期区分を変えた本分析での、明治 20 年頃と明治中期以降の幼児唱歌の比較においても認められた。明治 20 年頃と明治中期以降の幼児唱歌、現在の幼児の歌の 3 群での比較においては、明治中期以降の幼児唱歌と現在の幼児の歌で「最高音が 2 点ホより上」「弱起」「3/4、3/8、6/8」の項目で同様に負の有意性を示し、明治 20 年頃の幼児唱歌と比較すると、幼児にとって歌いやすくなっていると思われるが、四七抜き長音階の使用については、現在の幼児の歌では有意性がみられず、明治中期以降の幼児唱歌の特徴と言える。また「ぴょんこ節」のリズムは、明治中期以降、現在の歌まで引き継がれているリズムであることがここでは示唆されたが、このリズムは伝統的なわらべうたにも多くみられる[13]ことから、より長期的な範囲での考察も必要であろう。今回は、明治時代から大正、昭和を越えて現在の幼児の歌を比較したが、大正、昭和においてつくられた幼児の歌も比較する変数として加えることによって、音楽的特徴の変化の道程がより明らかになると思われる。

註

註 1）唱歌の名称は、明治 5 年の学制以来の教科名であり、狭義には官製の唱歌集所載の唱歌に限って使用されたりするが、一般的には戦前までにつくられた主として教育用の歌全体が唱歌と呼ばれる傾向にある（文献 9）。このことから本研究では創作された時

代により、明治時代の、幼児を対象につくられた歌を幼児唱歌、戦後から現在に至る、幼児を対象につくられた歌を現在の幼児の歌と呼ぶ。

註２）歌詞のみ書かれている。

註３）分析対象曲には、曲の途中での拍子の変化や転調のあるものはなかった。また四七抜き長音階で「該当」と入力するものは完全に四七抜き長音階の曲とした。

註４）http : //aoki2.si.gunma-u.ac.jp/R/qt2.html3

文献

１）山住正己（1967）唱歌教育成立過程の研究，東京大学出版会，p.112.

２）三村真弓（1996）明治期幼稚園唱歌教育における唱歌教材に関する研究－教材の形態的側面の検討を中心に－，（広島大学教科教育学会）教科教育学研究，11, 27-36.

３）同上，p.28.

４）岩口摂子（2000）現代子どもの歌の研究（1）－その二重構造におけるハーモニーの比較分析－，宮城学院女子大学・同短期大学附属幼児教育研究所研究年報，9, 11-25.

５）岩口摂子（2001）現代子どもの歌の研究（2）－その二重構造における旋律の比較分析－，宮城学院女子大学発達科学研究，1, 53-70.

６）岩口摂子（2002）現代子どもの歌の研究（3）－その二重構造におけるリズムの比較分析－宮城学院女子大学発達科学研究，2, 39-51.

７）岩口摂子（2008）定着化した保育歌唱教材における歌詞の特徴について，教育実践学研究，10-1, 21-30.

８）全国保母養成協議会専門委員会（1995）基礎技能・保育実習に関する研究，保母養成資料集　第 14 号

９）嶋田由美（2009）明治後半期「唱歌調」とは何か－その構造的特殊性と生成に至る教育的背景－，音楽教育学第 39 巻第 1 号，pp.1-12.

10）奥中康人（2008）国家と音楽－伊澤修二がめざした日本の近代－，春秋社，pp.142-146.

11）千葉優子（2007）ドレミを選んだ日本人，音楽之友社，p.73, pp.108-109.

12）前掲 2, p.27.

13）前掲 11, pp.110-111.